

中国漢代の羌（四）

——生態学的辺境と民族的境界——

王 明珂（柿沼陽平・訳）

【解題】

本稿は、台湾中央研究院歴史語言研究所研究員・中興大学歴史学系講座教授兼文学院院長の王明珂氏が一九九二年に米国ハーバード大学に提出した博士論文『The Chiang of Ancient China through the Han Dynasty: Ecological Frontiers and Ethnic Boundaries』の第四章の日本語訳である。第三章以前の部分の訳稿はすでに別途『早稲田大学長江流域文化研究所年報』第三〇五号（二〇〇五～二〇〇七年）で発表した。王明珂氏は博論提出後、中国周辺諸民族に関する大著を台北で次々に発表しており、たとえば『華夏辺縁——歴史記憶与族群認同』（允晨文化出版公司、一九九七年）、『羌在漢藏之間——一個華夏辺縁的歴史人類学研究』（聯經出版事業公司、二〇〇三年）『英雄祖先与弟兄民族』（允晨文化出版公司、二〇〇六年）、『游牧者的抉択——面对漢帝国的北亜游牧部族』（聯經出版公司、

二〇〇九年）が挙げられる。本博論は、理論的にはそれらの原点に位置づけられるとともに、実証的には中国古代の羌に関する専論としての意義を有する。

第四章 羌とその変動する民族的辺境

本稿ではこれまで、羌（河煌地域の自然環境に長期適応した結果、経済的・社会的・文化的に漢代中国人と区別されるようになった部族組織下の人々）の形成に関して環境的観点から説明を加えてきたつもりである。だがこれは、我々の考察の一面をなすにすぎない。「そもそも」河煌の人々は、漢代中国人のいう羌に限られない。また漢代中国人は、甘肅回廊・トルキスタン・四川―チベット間の境界地帯に住む非中国人をも羌と呼んだ。しかも羌というエスニックラベルは漢代初出ではな

く、それ以前の商代と戦国時代にもみられ、それゆえ漢代河
煌羌は概して古代羌人の主たる子孫とみなされている。「こ
れらの背景を全て説明することなくして羌の形成史を解明し
つくすことはできない」。

〔そもそも〕商代以来の羌史については多くの研究がある。
先学は、羌の地理的起源や地域間移民に関する問題を検討し
てきた。だが本稿では、新しい視点から羌史を検討する。す
なわち羌とは、中国西方辺境に代々いた人々であるのみなら
ず、中国人の心に代々内在した概念である、と。それは「我々
ではない西方人」という概念である。羌はこのように中国人
と区別される存在であるがゆえに、河煌人（中国人を含む）は
羌に限られない。むしろ彼らが羌であるのは、漢代中国人が
そう信じたからなのである。本章では、このように漢代河煌
人が羌の母体となった理由と過程を説明する。

本目標を達成するにあたり、本章ではまず二つのエスニッ
クラベル——内名 (autonym) と外名 (exonym) ——および、
民族を定義する際に当該二概念が有する意義を区別する。そ
して外名としてのエスニックラベル羌がなぜ古代中国人によつ
て西方の民族的境界を描くのに用いられたのかを説明する。
また本章では、当該民族的境界が商代→漢代にいかに関西漸し、
それとともに西方人がいかに漸次的に中国人化し、環境的限
界地点とおぼしき地域（東方からみれば、その住民を中国人へ変
えることは不可能な地域）にまで至ったのかを跡付ける。

第一節 内名と外名

エスニックラベルの社会的意義は、人類学者の目を引くも
のではあつたが、歴史上の「人々」について研究する歴史家
の大半には無視されてきた。一般に、同一のエスニックラベ
ルをもつ人々は同一の民族に属するとされる。これはたしか
に一理あるが、実態はさらに複雑である。エスニックラベル
は内名（人々が自分自身を同定するのに使用）とも外名（部外者
が所与の集団をさすのに用いるラベル）ともなりうるからである。
内名は、自己の観点から自己の属する集団を画定し、また
「我々は誰か」という問いに答えるものである。一方外名は、
特定カテゴリ外の者の視点から当該カテゴリを表象するもの
である。それは、カテゴリ外の人々が抱く「彼らは誰か」に
関する考え、もつと正確にいえば「我々に属さない人々は誰
か」に関する考えを表現する。エーバーハルトの指摘通り、
内名はしばしば「人」と一致する概念で、逆に外名は「野蠻
人」や「非一人」を意味する¹⁾。

人類学者は長らく民族を、原住民の認識に基づくカテゴリ
として定義しようとしてきた。早くも一九六〇年代にリーチ
は、社会単位が外部観察者の基準ではなく原住民の主體的認
定によって生ずると指摘した²⁾。リーチの概念は、人類学者間
で広く討論的的となった。そこで問題となったのは、分析的

単位としての民族の定義が観察者の基準に基づくべきか、あるいは土着の社会的分類に基づくべきかである。³⁾だがフレドリック・バース編のシンポジウム論文集『民族と境界』出版後は、バースがのべるように、「民族とは本人達自らが認定・同定したカテゴリである」との考えが一般的となった。同様の理論的流行のもと、先学は民族的仲間意識の重要かつ便利な標章としての内名の意義を広く認識するようになった。⁵⁾

だが外名の重要性も無視はできない。もし観察者が部外者を観察者自身の用語でラベリングした場合、観察者は無名の人々の多様性を有徴の人間カテゴリにアレンジすることで単純化している。⁶⁾その分類基準は、観察者が非常に顕著と信ずるいくつかの実在する文化的もしくは身体的特長に基づく。

よって以下の二要因が、そのように外名によって描かれる集団の範囲を画定する。すなわち、観察対象の集団内で起こる文化的・人口統計的変化と、観察者間で起こる文化的・人口統計的変化である。そしてこれら二変化は外名の羌にも起こるのである。

エスニックラベル羌の初出は、商代後期(紀元前十四世紀頃～紀元前十二世紀頃)の甲骨文である。それによると羌は、商人が一部の西方野蛮人を同定するために用いたエスニックラベルであったことが知られる。その後、西周(紀元前一〇〇〇年頃～紀元前七七一一年)になると当該ラベルは金文を含む史料から消失する。そしてそれは「氏羌」と連称される形で

戦国時代(紀元前四八〇年～紀元前三二三年)の思想書に再登場し、最終的に漢代(紀元前二〇二年～紀元後二二〇年)には、羌の語は全て、河湟地域を中心としつつ中国の西方・北西・南西に広く散在する非漢人(達)をさすようになった。本章では、このような羌なる語が一体なぜ外名として用いられ、またその人口統計的・地理的含意がいかに時間的に変化したのかを説明する。

第二節 商代後期(紀元前十四世紀頃～紀元前十二世紀頃)の羌

甲骨文中の羌

商代甲骨文中羌は「𠂔」・「𠂕」に作る。これらの象形文字は羊と人という二つの構成要素よりなる。孫詒讓が本字を最初に「羌」に釈したが、「𠂔」や「羊」などに釈する研究者もある。だが孫詒讓説のちに董作賓・商承祚・陳夢家・李孝定・白川静に追認され、現在では通説となっている。⁷⁾

甲骨文によれば、商人は特定の地域・国・人々を羌や羌方と称したことが知られる。先学は、この羌方とその関連地域の位置の特定を試みている。陳夢家は、羌と様々な形で関連する国を調べつつ、当該地域を「晉南(山西南部)」か「河内附近の太行山地域」にあつたとする。⁸⁾陳夢家説は、商王の田獵地の範囲を研究した李学勤に支持され、李学勤は羌方を山

西南部か、あるいは遠く西方にあったとする。羌に關する類
似の土地比定は白川静も行っている。すなわち羌は、平野—
丘間の縁沿いの河南南部にいたのであるう、¹⁷。烏邦男はさ
らに徹底的な研究を行っている。それによると羌は、黄河沿
岸の陝西北西部にいたという。¹⁸ 諸説には細部に違いもあるが、
どれも概して羌というエスニックラベルを付された人々が商
の西方（ほぼ現在の陝西西部・山西南部と河南西部）に分布した
ことを認めている。先学は羌の広範な分布を考慮し、羌を、
商人が西方非中国人をさすのに用いた一般的なラベルであつ
たと解している。¹⁹

甲骨文中の豊富な証拠が、羌が商人からみて商西方の敵対
の人々であったことをしめしている。たとえば甲骨文には、
安陽期を通じてほぼ継続的に行われた商—羌間の戦争に關す
る膨大な記録がある。²⁰ 当該戦争は時に大規模で、一度に商王
が五族（リネージカクラン）を徵発したり、別の事例では一万
人が対羌の戦地に派兵された。²¹

甲骨文の別組の例も非常に豊富で、当該戦争で捕われた羌
人達が、商人らによつて祖先祭祀の多様な儀礼の生贄に捧げ
られたことをしめしている。²² 別の例では、捕われた羌は奴隷
とされ、狩猟や農作業といった多種多様な労働に従事してい
る。²³ 贅言するまでもなく、商人にとつて羌は敵であるだけで
なく、「他の人々」であり、それゆえ非—人として扱われた。
すると次に問題となるのは、商人に羌と認定された人々が、

彼ら自身、同様のアイデンティティを有していたか否かであ
る。換言すれば、商代の羌は外名であったのか、それとも内
名であったのかである。以下の三つの証拠によると、羌は外
名であった可能性が高い。第一に、甲骨文の羌は「羌」にも
作り、それは首繩で捕縛された羌人に象る。このラベルは明
らかに、当該ラベルの被添付者に悪意を有する人々が創造・
使用したもので、被添付者による自己同定のラベルではない。
第二に、既述のごとく羌は商の西方の広範な地域に分布して
いたので、羌は、商人が西方野蛮人に付した一般的なラベル
であつたとされている。²⁴ 第三に、内名は民族仲間意識の重要
かつ便利な記号なので、²⁵ もし羌が内名ならば、羌なる「民族」
が実在し、商の西方に広く分布していたことになるはずであ
るが、この説には検討の余地があると思われる。というのも、
羌というエスニックラベルは、周による征商以来五百年間に
わたり、ほぼ消失したからである。この現象は、商代の羌が
外名であつたこと、それが当時の商人の心の中のみ存在し
た人間分類であつたことを強く物語る。

これら全ての疑問点がある以上、羌を自己同定された民族
とする説は非常に疑わしい。逆に、エスニックラベルの羌が
外名（商人がそれをを用いて他者を同定した）であつた可能性は非
常に高い。羌の字形と羌関連の甲骨文の文脈をみるかぎり、
商人の有する羌概念は次の要素を含んでいたであろう。すな
わち彼らは、①西方野蛮人で、②我々の一員ではなく、よつ

て非一人として扱われたはずで、③羊（もしくは山羊）と関連する経済的ないし文化的特徴を有していた、と。

ここで一つ問題が残っている。すなわち商人は羌の有するどのような羊関係の特徴を以て、彼らを羌だと認定したのか。「結論からいうと、」羌が羊や山羊と結び付く可能性のラインは非常に多く、たとえば生存手段や宗教やトーテムズム、もしくはそれら三種の組み合わせ等があるが、その特定は不可能であろう。もつとも、商から千年以上後の後漢時代の中国人は、単純な一解釈を提案している。すなわち羌は西方の羊飼いであった、と。²⁶ 当該解釈をしめた人々は、相当程度農業中心の文化的価値を育んだ人々であったと思われる。すなわち、羌は羊の飼育を生活の主たる糧とし、我々とは異なる存在であった、と。しかし一般に認められているように、商人がそのような考えを懐いていたはずだとみるのは的外れであろう。また、もつと興味深い別解として、商代の羌を渭水流域にいた当時の姜クランと同一視する説もある。「だがこの仮説にも検討の余地がある。次にこの点を確認しよう」。

西方の姜クラン

姜はおもに渭水流域に居住しつつ、商代後期～西周期に影響力をもったクランであった。姜は周にとって征商のための重要な政治的・軍事的伴侶であっただけでなく、周王がその中から頻繁に妻を娶ったクランでもあった。²⁶

姜クランは一般に、羌の一支族もしくは羌そのものとされている。²⁶ 理由は以下のごとくである。第一に、姜姓とエスニックラベル羌との音韻的・文字的類似性は明白なので、先学は当該二語が同一語源をもつと推定している。²⁷ 第二に、羌も姜クランも商と敵対的で、ともに西方人である。第三に、もつと直接的な証拠が『後漢書』西羌伝にあり、その中で羌は姜クランの一支族として明示的に描かれている。²⁸

だがこれらの証拠を検証すると、これらが信頼に足るものでも説得的でもないことがわかる。第一に、商代甲骨文の羌は姜字に作るできない。また姜が金文や周関連の文献で羌と記録されたこともない。当該二字は実際に区別されていたのである。第二に、たとえ羌と姜がともに商への敵意を共有していたとしても、その状況は異なっていたであろう。すなわち、野蛮人もしくは非一人とさえいわれた商代羌の特徴が既述のごとくであったのに対し、姜は、商やその盟邦に抗するために姫クラン（周王家の姓）やその他の西方クランと同盟を結んだ重要な西方クランであった。また周とおそらくその盟邦の一部（たとえば姜クラン）がもともと商の政治的ネットワークに組み込まれていたことにも注目される。（つまり姜は非一人ではないのである）。これら全てが、姜クラン（のみ）が商とその盟邦の主たる征伐対象ではなかったはずであることをしめしている。また姜の人々が長期にわたり商人の生贄に用いられた可能性はさらに低いであろう。

「羌+姜」とする第三の証拠は、征商以前の姜クランの分布地域にある。それは渭水中流域の宝鶏〜西安間にあたる。⁽²⁹⁾

よって、もし先学の大半がしめす羌の地図的分布が正しいとすると、羌と姜クランは実際に地理的に区別されるのである。

最後に、『後漢書』西羌伝の羌の起源に関する記載も羌—姜間の関連性を証する確証とはみなしがたい。本史料が信頼に足らぬことを証する上で、まず『後漢書』西羌伝の羌の起源に関する記載を検討しよう。

西羌の本は、三苗自り出で、姜姓の別なり。其の國、南岳に近し。舜、四凶を流すに及び、之を三危に徙す。河關の西南の羌地、是れなり。賜支に濱いて、河首に至るまで、地を綿ること千里。⁽³⁰⁾

まず気づくことは、本史料が漢代河湟地域に住む羌の起源を探ることを目的としている点である。また本史料は、商代の羌に付随的に舐れるにとどまり、西羌伝全体でも商代の羌に言及するのは二回のみで、一つは「武丁に至りて、西戎・鬼方を征し、三年にして乃ち克つ。故に其の詩に曰く、「彼の氏羌自り、敢えて來王せざる莫し」と⁽³¹⁾、もう一つは「武王の商を伐つに及び、羌・髡、師を率いて牧野に會す」とあるものである。贅言するまでもなく、前者は『詩経』商頌⁽³²⁾、後者は『尚書』牧誓に由来する⁽³⁴⁾。これらに加えて商周時代の史料には、おもに戎・鬼方・夷の活動に関する記載があるが、これらは、羌史と間接的に関連し、もしくは無関係でさえあつ

た人々に関する史料である。このことは、漢魏晋時代の歴史家が商代の羌について、前掲の『詩経』商頌と『尚書』牧誓以外の史料を知りえなかつたことを示唆している。

次に前掲西羌伝では、羌の起源は、姜クランのみならず、伝説上邪悪かつ野蛮とされた三苗とも関わりとされ、またたとえば南岳や三危といった不明確な地理的用語とも関わりものとされていた。このストーリーの筋は明々白々である。第一に、『尚書』堯典には三苗が遠く三危の地へ追放されたとある。また『左伝』によれば、姜戎の祖先は東遷以前に瓜州に住んでいた。よって魏晋時代（紀元三二〇〜四二〇年）の注釈家達は、三危と瓜州が敦煌付近にあつたと解したのである。⁽³⁵⁾ これらの関係は以下のごとくである。

三苗——三危——瓜州——姜戎——羌

かくして羌は三苗の子孫であり姜の支族であるとされた。以上の羌の民族形成史は明らかに、歴史家の学問的伝統ではなく注釈家の学問的伝統の中で構築されたものである。⁽³⁶⁾ よってこのような民族形成史を確たる史実とはみなせない。西羌伝の羌に関する記述のごとき、民族形成史話の似非歴史的多くは非歴史的性质については次章で検討する。

上記の全証拠をみると、羌—姜間の繋がりをしめす説得的論拠は何一つ見出せない。むしろ商代の羌は、商人が西方の広範な人々をさすのに用いたラベルであつた可能性が非常に高く、それに対して姜は自己認定・自己同定のカテゴリであつ

た。彼らは共通に姜姓を称するのみならず、「太嶽」を共通の「裔胄（祖先）」と称した³⁷。よって姜と羌は別次元の人間カテゴリーであった。羌は外名、姜は内名であったのである。両概念には重複もあつたに違いないが、完全に同一ではなかつたのである。

第三節 周代（紀元前一一〇〇年頃～紀元前二五六 年）における族名としての羌の不使 用と再使用

紀元前一一〇〇年前後、周人とその西方盟邦は商を征服した。この大勝は周の時代をもたらしした。最初の数百年間、周王は渭水 downstream の鎬に政治的中心を建設した。新たに獲得された地は多くの国に分割され、王族とその親族、そして盟邦の長に分与され、彼らは自己領域内の人民を支配することを許された。これは中国版「封建制」である。また紀元前七七一～七〇年頃（紀元前七七一～七〇〇年頃）の終わりである。

周王は東遷によつて本来の広範な権威を失い、雒邑とその周辺地域を支配しうるのみとなった。旧来の支配地は相当程度独立的な封建諸侯のもとに留めおかれ、彼らは定期的に相

互に戦い合った。

西方では、紀元前七七一の事件以降、それによつて渭水流域が蛮地と化すことはなかったものの、代わりに秦人が好機を得た³⁸。秦人はおそらく戎に起源をもち、嬴クランに率いられていた。紀元前七七一の事件以後、秦人は戎人の大半を征服し、自ら華夏の国を名乗り、周王にそう認められた。以後、秦はどんどん強くなつていった。最終的に秦は、紀元前二五六年に周を滅ぼし、その後の三五年間で、ともに覇を競いし諸国をことごとく滅ぼした。かくて紀元前二二一年に中国史上最初の統一帝国たる秦が出現した。

以上のような周代における政治的変化の社会的・経済的意義に関する二次史料は大量にある。ただし本研究では、民族領域上のいくつかの顕著な変化にのみ注目する。すなわち後述するように、これらの紀元前一一〇〇年～紀元前二二一年に起こつた政治的変化は、一連の新しい政治権力のみならず、華夏人の段階的形成をも帰結した。西方では、より多くの西方人が華夏の政治的もしくは文化的領域に合併され、それに伴つて華夏の民族的境界も一歩ずつ西方へ動いていったのである。

それでは、「紀元前七七一」周とその盟邦が東遷し、自ら夏人・商人の文化的・政治的後継者たることを主張する中であつて、羌には何が起こつたのか。答えは、エスニックラベル羌が周東遷直後に漢文史料から完全に消え去つたとい

うものである。そして概括すると、その時に周代華夏人は「戎」を、西方野蛮人をさす族名 (chinoumi) として用いるようになったのである。「次にこのことを説明しよう。」

周代の戎とは何者か

戎人の民族的性質は大いに注目すべき問題である。ラティモアは、戎が「後進的で、同民族 (中国人の原点たる古代中国人) の中でも発展が遅く」、「依然として周自身のかつての姿をしていたのであろう」とする。⁽⁴⁰⁾ 他の先学は、戎の非中国人的性質を強調する傾向がある。たとえばフリードリッヒ・ハースは、戎人とトルコ人の関係を示唆する。⁽⁴¹⁾ エーバーハルトは戎人をプロトチベット人とする。⁽⁴²⁾ プーリーブランクは戎を周代非中国系チベットビルマ諸語に一般的な名称であったとし、周人は戎人 (もともと周の東遷以前に中国化を経験していた人々) であったとする。⁽⁴³⁾

これらの研究は戎に関する私見に少しく有用である。だが、先学諸氏が戎を特定のカテゴリ (たとえばプロトチベット人・チベットビルマ系・プロトトルコ人といったカテゴリ) に結び付けようとした背景には、戎が、今もなお存在する一部の集団と繋がる言語的もしくは人種的特徴を有する集団であったとの前提があるように思われる。だがこれには同意できない。理由はシンプルである。というのも、華夏の有する民族概念の戎は、華夏人の民族的境界自体がまだ形成途上の紀元前一

一〇〇年、紀元前二二一年の各時点においては、様々な意味をもっていたはずだからである。この点については後述する。

戎の字形はおもに戈 (武器) と甲 (鎧の一片) よりなる。紀元後二世紀の文字学者許慎によると、戎の原義は武器であった。⁽⁴⁴⁾ 戎がいつどのように非中国的野蛮人をさす族名になったのかは不明だが、族名の戎は商代甲骨文には見えない。他方、それは周の史料に類見する。よって、戎の族名化が周人のあいだで起こったことはほぼ間違いない。

戎の前身については、数多くの論拠によると、姫クランの周人・姜クラン・嬴クランの秦人の三者であろう。すなわち、周人―戎間の関連性については長らく先学が検討している。⁽⁴⁵⁾ すなわち姫クランは、農業的生活への適応と戎習俗からの脱却による文明化以前には、戎のあいだで生活していたのである。⁽⁴⁶⁾ また武王征商後にもなお、漢文史料の中で戎とされ続けた姫クランの数支族がいた。⁽⁴⁷⁾

次に、姜クランと戎との関連は、姫と戎との関連よりも強固であったであろう。『左伝』によると、晉と対秦同盟を結んだ戎集団 (姜戎) は実際に姜クランの一支であった。⁽⁴⁸⁾ 『国語』には、姜クラン内の戎集団が周宣王の軍を破ったとある。⁽⁴⁹⁾ 中国の人々 (渭水流域の姜クラン中最強) でさえ、漢文史料では申戎とされた。その上、申と戎の関連性は、紀元前七七年のクーデターで犬戎の助けを借りて申侯が幽王を殺害し、全ての周王族と追従者を渭水流域外へ駆逐した事実に端的に

しめされている。⁽⁵⁰⁾

最後に、秦人と戎の関連は最も強固であつたろう。だが秦人の民族形成史には相矛盾する二つの理論がある。すなわち、嬴クラン（秦の支配層クラン）の歴史とその他のクランの地理的分布を重視する先学は、秦（少なくともその支配層）を東方起源とし、漢文史料に秦と戎の関連がみえる点に注目する他の先学は、秦人を渭水流域の原住民としてしているのである。⁽⁵¹⁾

たしかに、嬴クランの東方の一族が渭水上流域へ移動し、原住民のあいだで繁栄した可能性はある。だが、秦人を東方起源とする考えが、もし『史記』秦本紀の秦民族形成史にのみ基づくのであれば、その説には同意しがたい。というのも、あらゆる民族形成史話に由来する情報は必ずしも歴史的事実ではないからである。次章でこの問題に戻ろう。

今かりに秦の嬴クランが東方に起源したと解したとしても、彼らは西周末期までに、すでに相当長期間渭水流域に住んでいたわけで、その全員もしくは大半が渭水流域の原住民に由来したことになる。要するに、後述するように、紀元前九世紀、紀元前八世紀の秦は、華夏、戎間のどこかにアイデンティティを有していたと思われるのである。

戎と姫・姜・秦の嬴クランとの民族的関係は、以下の史料にもよく描かれている。すなわち、周孝王期（紀元前九〇九年、紀元前八九五年）に秦の創設者非子（大駱の子で、渭水流域の嬴クランの長でもある）は、馬の飼育を以て周王によ

く仕えた。その褒美として周王は、非子を大駱の後継者成と同じ位にまで格上げした。だが成は、姜クランに属する強大な申侯の孫でもあった。申侯は非子の格上げに反対し、次のように王にのべた。

昔、我が先の酈山の女、戎宵軒の妻と爲り、中滿を生む。⁽⁵²⁾
親の故を以て周に帰し、西垂を保ち、西垂は其の故を以て和睦す。今、我は復た大駱に妻を興え、適子成を生む。
申・駱、婚を重ねれば、西戎は皆な服すべし。所以は王の爲なり。王、其れ之を図れ。⁽⁵³⁾

本史料は、姫・姜・嬴クランと戎との、重要だが微かな関係をあらわにする。すなわち、西周時代の渭水流域において華夏―戎間には明らかに比較的ゆるい民族的境界があつたと思われる。少なくとも二つの民族集団（姜クランの申族と嬴クランの大駱）は、民族的境界の枠を越えて相互交流していた。姫・姜・嬴クランのうち、大駱率いる嬴クランと最も緊密なのは戎、次は姜で、最も疎遠なのが姫であつたことも明白である。よつて周王―戎間の関係性は間接的に、姜―嬴間の親近性と関連付けられたはずである。⁽⁵⁴⁾要するに、西周時代に渭水流域の民族的辺境上で戎や華夏であることは、ある意味、程度の問題であつたのである。

それでは、ここで西周没落後の渭水流域における変化に注目しよう。紀元前七七一一年の動乱時に秦は周王に忠誠を誓つた。その結果周王は、秦が戎を岐西方の地から駆逐した暁に

は秦に当地を与えると約束した。かくて秦―戎間の長期戦が始まった⁵⁷⁾。秦が戎との関係を完全に除去して華夏人化したのはこうした状況下であった。秦の中国化と紀元前七七一年の事件は、戎―夏間の最後に残った関連性を断ち切ったわけである。

春秋戦国時代になると、戎は河南から甘肅東方へ広く拡散したことが知られる。この広範な拡散は従来、西周崩壊後に西方野蛮人があまねく北方・西方中国を放浪したものと説明されてきた。その可能性はある。だが別の説明もありうる。

すなわち、戎の広範な分布は中国人の形成過程が新局面に到達したサインであろう、と。すなわち、このときになって中国人は、「我々」カテゴリから除外さるべき多様な集団の存在を認識したのである。

これまでに検討したことをまとめると、族名の戎は、初めは渭水流域の原住民をさしていたかのごとくである。彼らは姫クランを生んだ人々で、⁵⁸⁾ 姫クランは戎の中から対商戦争の軍事的盟邦を得た。武器と鎧よりなる戎の字体は、その戦争好きな性格をしめすように思われる。姫クランとその盟邦(たとえば姜クラン)は征商前後に中国化の過程を経たはずである。⁵⁹⁾ 戎への対応は、申などの姜クランの一部(征商後に渭水流域に居住し、それゆえまだ戎集団と一定の関係を有していた)に委ねられた。「ところか」紀元前七七一年の事件以来、秦の中国化が起こるや、華夏―戎間の最後に残った関連が切断

された。こうして春秋戦国時代になると、エスニックラベル戎は概して西方非中国人をさすようになり、それ以外の三つのエスニックラベル蛮・夷・氏(それぞれ南・東・北の野蛮人を表象)と対応するようになった。

今や、戎の歴史を広く各時代・各地域に分布した血縁的・言語的もしくは文化的特長を共有する集団の歴史とみなしたいことは、さらに明白となったはずである。その代わりに戎の歴史は、民族的境界がいかに形成されるかという観点から中国人の形成を説明するための最良の事例を提供する。すなわち、西方人の一部が華夏へと変容した一方で、戎は民族的境界の境界線となり、それを通じて今や活発化していた華夏人は民族的境界を画定したのである。

戦国時代の氏羌概念

「ところか」春秋時代(紀元前七七年～紀元前四八一年)・戦国時代(紀元前四五〇年～紀元前三二一年)になると隴山東方の戎の大半は多種多様な華夏に征服・合併された。同時期に族名の「氏羌」が漢文史料中に出現した。

『詩経』商頌には、商王成湯期に氏羌から派生した全ての国が「氏羌」に従属したとある。⁶⁰⁾ 『逸周書』王会解では、氏羌は鶯鳥を周王に貢物として献上している。⁶¹⁾ 氏羌の語はまた『呂氏春秋』と『荀子』にもみえ、遺体を火葬する人々とされる。⁶²⁾ 『呂氏春秋』では、氏羌はまた離水西方に住み、周王

に支配されない人々とされる。⁽⁶³⁾最後に、『山海経』海内経には乞姓があり、四系が含まれる。最古の伯夷父、次に古い西岳、その次に古い先龍、そして最も新しい氏羌である。

一般に認められているように、これらの諸書の正確な年代比定は困難である。なぜなら諸書はどれも単独の撰者の手になるものではなく、同一書の異なる篇は異なった時期に作られたものかもしれないからである。だが前掲諸書の氏羌に関する篇がどれも春秋時代より前に書かれたものでないことは確かである。たとえば『詩経』には最古の漢文史料が一部含まれるが、内容的にみると『詩経』商頌は戦国時代に書かれたものと考えられている。⁽⁶⁴⁾また『逸周書』には、西周金文と類似の書式を有する文書が一部含まれる一方で、戦国時代以降の民族的概念や地理的概念である義渠・楼煩・渠搜・匈奴・長沙などを含む王会解のようなものも含まれる。⁽⁶⁵⁾同様の理由で先学は、『山海経』海内経を戦国時代以後の作とする。⁽⁶⁶⁾

『荀子』大略篇はさらにおそい。大略篇が荀子自身の作ではなく、荀子の学生もしくは漢儒の作であることは随分前から知られていた。⁽⁶⁷⁾最後に、『呂氏春秋』の年代は明確で、戦国末期に完成した。また先学は一般に『呂氏春秋』の内容と成立年代にはほとんど疑念を持っていない。⁽⁶⁸⁾前掲諸書の詳細な年代については諸説あるかもしれないが、これらは少なくともほぼ春秋時代と漢代前期の中国人の思想をしめすものと推測される。

次に前掲諸史料の性格と、その中でも氏羌の語を含む箇所注目しよう。まず前掲諸書が、『詩経』商頌を除き、全て戦国思想家の作であることに注目すべきである。第二に、前掲諸書とくに氏羌関連の諸書はどれも伝説・想像・民間伝承・伝聞に拠っている。たとえば『逸周書』には、氏羌と諸外国もしくは蛮人が自ら周王に服属し、貢物として貴重な宝物や伝説的動物を献上したとある。その中の一人々々（たとえば黒豹・白民・歐人）や動物（たとえば乘黄・駒騄・文馬）は、地理・人間・動物の伝説に満ちた『山海経』にもみられる。⁽⁶⁹⁾同様の状況は『呂氏春秋』にもみられ、氏羌を含む多様な人々が言及されている。その一部は饕餮や窮奇といった人々で、彼らの伝説的特徴は他の漢文史料にも明瞭に示されている。もつとも、それら以外の大解・陵魚・送龍・鹿野といった人々は他に見えない。彼ら氏羌の地理的分布は、前掲の『逸周書』や『呂氏春秋』に明示されてはいないが、東方人のカテゴリに含まれる。

『呂氏春秋』によると、氏羌の語はまた、敵に捕縛されることそのものよりも、それによって自らが死後に火葬され得なくなることを心を心配するような人々をさした。⁽⁷⁰⁾ほぼ同内容の段落が『荀子』にもみられる。火葬を実施する人々は『墨子』にもみえ、秦西方の義渠とされる。⁽⁷¹⁾これら三つの参考資料は間違いなく同一情報に基づいている。⁽⁷²⁾

前掲諸史料を基礎にいえることをまとめると、戦国時代に

族名氏羌は、おもに思想書に現れ、伝説上の人々や伝聞でのみ知られる西方人を表象した。他方で氏羌の語は、『国語』

『戦国策』『左伝』といった、現実の人々や当時の出来事に関する記録の中には見出せない。よって戦国時代における氏羌の語が、彼らが自己同定するのに用いた内名ではなく、中国人が用いた外名でもないことは疑い得ない。そうではなく、氏羌は西方人の伝説的な人々のカテゴリーであったのである。

ここで次のような疑問が湧く。なぜ五百年間も消失していた族名の羌が、原形の羌ではなく、氏羌という形で再度出現したのか。一般に認められているように、この疑問に適切な解答を与えることは困難である。だがそれは甲骨文に由来した可能性がある。すなわち甲骨文には ϕ 々(氏羌)という二字連続の語が頻見する。一部の先学は ϕ 字を現代中国語の「以」とし、他の先学は「氏」とするが、いずれにせよ当該字は一般に「呼び出す」や「捕まえる」の意の動詞とされる。一部の先学によれば、甲骨文の ϕ 字と現代中国語の氏字の字形的類似は両字の同一性を想起させるもので、ゆえに春秋戦国時代において ϕ と氏は同字の可能性があったという。だが現段階では証拠不足で、定見に至るのは不可能である。

要するに、春秋戦国時代の中国人は、戎よりもさらに西方の人々に対して曖昧なイメージを抱いており、その時に「氏羌」が、そのような遠方の西方人をさす概念として出現した。その際に氏羌概念は、伝説や伝聞でのみ知られる人々をつね

に意味し、当時中国側と直接的接点をもつ人々のことは含意しなかったのである。

第四節 後漢時代における羌概念

戦国時代の次の時代は、秦帝国(紀元前三二一年～紀元前二〇六年)と漢帝国(紀元前二〇二年～紀元後七年)の時代である。当該時期の中国は政治的中央集権化と領域的・民族的拡大とに特徴付けられる。西方では、たとえば中国式の軍隊・政治的支配・農業・文化的価値が、レスやその他の耕作に適した土壌を含む全地域へと浸透した。同時に、西方人に関する知識がいちじるしく増加し、エスニックラベル戎は西方非中国人の多様性全てを描き出すには不十分となった。このような状況下で、かつては強靱とされ不人気でもあった戦国時代の西方非中国人概念は、氏羌から氏・羌へと二分された。以下では、その中でも羌概念が紀元前三世紀～紀元後二世期にかけて、地理的・人口統計的にいかに西方へ移動したのかを説明したい。

紀元前二世紀前後、漢代隴西郡には羌道・氏道の二地域があった。隴西郡は、紀元前二七二年の秦の義渠戎征服後に建てられ、戎がもともと支配していた東方隴山～西方永靖付近黄河流域の地を制圧下においた。秦代における隴西の地名はほとんど知られていない。²⁹⁾しかし氏道と羌道は早くも前漢最

初の数十年間に現れたであろう。『漢書』には、紀元前一八七年に武都道と羌道で発生した地震の記録がある。⁽⁸⁰⁾また『後漢書』には、前漢景帝期（紀元前一五六年～紀元前一四一年）に研種の羌を隴西郡に移住させ、「狄道・安故に徙し、臨洮・氏道・羌道縣に至らし」⁽⁸¹⁾めたとある。だが、『漢書』が紀元前一八七年の地震から約三〇〇年後に成書され、『後漢書』が前漢景帝期から約六〇〇年後に成書された点にも注目すべきである。両史料は直接的・間接的に前漢の公的記録に基づくデータを用いたはずではあるが、明らかに前漢の同時代史料ではない。よって、前漢早期に羌と氏が地理的に隴西郡内にいたことをしめすには、別途さらなる証拠が必要である。この論拠として、司馬遷（紀元前一四五年～紀元前八六年?）の『史記』は必要な証拠を提供している。

『史記』における羌概念

大歴史家司馬遷は紀元前九〇年頃に記念碑的著作『史記』を完成させた。本書は、伝説的諸王期～漢代前期百年間の歴史を含む。よってそれは、漢代の一流歴史家が想定する羌の歴史と現実がいかなるものであったのかをしめすであろう。

まず羌関連の巻と、羌を含む文脈は以下のごとくである。

- (1) 五帝本紀。本巻で氏羌の語は、伝説の聖王舜に服属した西方非中国人をさす。⁽⁸²⁾

- (2) 周本紀。本巻の羌は武王征商に参加した多くの西方

人の一部であった。⁽⁸³⁾

- (3) 秦始皇本紀。本史料によると、秦始皇二十六年（紀元前二二一年）に秦が中国を統一した際、統一秦の領域は西方の臨洮・羌中に拡大した。⁽⁸⁴⁾

- (4) 六国年表。本年表の西羌は聖王禹が生まれた西方の地をさす。⁽⁸⁵⁾

- (5) 漢興以來將相名臣年表。ここで西羌は確実に、紀元前四二年に漢軍に攻撃された当時の人々をさす。

- (6) 平準書。本巻の羌は紀元前一二二～紀元前一一年の隴西における反乱にまきこまれたものとされる。

- (7) 李將軍列伝。本巻の羌は、当時の隴西郡長官李將軍に虐殺された人々である。⁽⁸⁶⁾

- (8) 匈奴列伝。本巻で氏羌と月氏はまず、匈奴右王の領域と隣接する遠方の西方地域とされ、のちに羌はまた非中国人とされ、彼らと胡との交流は酒泉設置で切斷されたという。⁽⁸⁷⁾

- (9) 衛將軍驃騎列伝。羌の語は、漢軍が紀元前一一九年～紀元前一〇六年に匈奴を攻撃できなかった理由をしめす段落中にみえる。その理由は、漢が東方・南方・西方で匈奴以外の敵（羌を含む）との戦争に巻き込まれていたからである。⁽⁸⁸⁾

- (10) 平津侯主父列伝。紀元前一三〇年前後の嚴安による上書に西方非中国人をさす羌燹の語がみえる。⁽⁸⁹⁾

(11) 淮南衡山列伝。紀元前一二三年の伍被による上書にも羌とあり、非中国人をさす。⁽⁹²⁾

(12) 大宛列伝。本伝で羌の語は、匈奴南方に住む人々をさし、彼らは匈奴に隣接し、中国と中央アジアとの連絡通路を遮断した。また本伝において地理用語の羌中(羌人の地)が出現した。⁽⁹⁴⁾

(13) 龜策列伝。本伝には「蠻夷・氏羌(もしくは蛮・夷・氏・羌と訓む)は、君臣の序無きと雖も、亦た決疑の卜有り」とある。当該文脈上、氏羌の語は野蛮人一般をさす。⁽⁹⁵⁾

(14) 貨殖列伝。本伝の氏羌は、西方・北西の諸郡(天水・隴西・上郡等)に経済的利益を与えた豊饒な地をさす。

読者はこれらを一見するやいなや、『史記』には羌関連の記録が膨大にあるとの印象をもつかもしれない。ただし、現存『史記』が原版『史記』とかなり異なることを想起せねばならない。まず『史記』の数巻は長らく失われており、現存の当該部分は明らかに後世の学者がしるしたものである。次に、紀元前一二二年(おそらく『史記』成立時期)以後や司馬遷死亡後の事象に関する記録は、『史記』原版とみなせない。『漢書』の該当箇所と比較すると、司馬遷後の学者が『史記』の補充を目的として、『漢書』から関連史料を採用して『史記』を補充したことは明白である。上述の『史記』の羌関連巻にはその両方が看取される。

たとえば(5)と(13)は長らく失われており、その現行版は司馬遷以後の学者が作った。また(5)の羌に関わる全事象は司馬遷の死後に発生し、当該箇所が司馬遷作でなかったことを追証する。

また(6)と(12)は『漢書』の写しである。⁽⁹⁶⁾ 崔適と梁啓超は、『漢書』該当箇所が『史記』の補遺に用いられたとす⁽⁹⁷⁾る。

(10)の嚴安による上書も羌との関連が看取される。だが五世紀の注釈家裴駰は徐広の言を引用し、嚴安は『史記』の別版を発見したわけではなかったとする。むしろ『漢書』には、個人的文書を関連巻に含める傾向があり、よって当該記録は初めから『漢書』に記録されていた可能性が非常に高い。

また『史記』の成書年代が、その中の原版ではない箇所を確定するための鍵を提供するであろう。崔適は司馬遷自序の記載に基づき、『史記』は紀元前一二二年に成書されたとし、⁽⁹⁸⁾ 梁啓超もこの説を支持している。⁽⁹⁹⁾ この成書年代に基づいて崔適はさらに、『史記』の関連巻の一部末尾には『漢書』の記事が補統されたとする。その補統箇所には前掲の(7)・(8)・(9)・(10)も含まれる。つまり当該四巻の羌関連の記録は、崔適によれば、驚くべきことに、『史記』の原版ではない巻末部分に相当することになるのである。⁽¹⁰⁰⁾

以上の崔適の言は必ずしも全て正しいわけではない。太史公自序の中で司馬遷が、『史記』の内容が麟止の年(武帝が聖

なる動物の鱗を捕獲した紀元前二二三年)に至ると述べているのは事実であるが、司馬遷には執筆継続の機会があり、紀元前一二二三年よりも少し後の話を補ったと推測することも不可能ではないからである。だが現行『史記』の羌に関する記録の大半が『漢書』に由来するか、紀元前一二二三年直後の事象に関わっているのは確かである。なぜなら前漢時代の西方隴西・河湟地域における非中国人関連のほぼ全事件が紀元前一二二三年〜紀元前四二年に発生しているからである。

今、如上の疑わしき記載全てを除外すると、残るのは(1)・(2)・(3)・(4)・(8)・(11)・(14)となろう。上述のごとく、五帝本紀では、氏羌は聖王舜に服属した野蛮人をさした。周本紀では、羌は対商戦争で周に与した。秦始皇本紀と貨殖列伝には、現実に羌中という地名が存在した。また六国年表では、聖王禹の出身地の西羌も地名であった。最後に淮南衡山列伝と匈奴列伝では、羌燮や氏羌の語は概して遠く西方に住む人々をさした。

先学が指摘するように、『史記』において羌の語はまず商代末期に出現し、周人の同盟者をさした。その後、羌の語は秦の中国統一まで見えない。換言すれば、商末期(紀元前一〇〇〇年頃)〜秦初期(紀元前二二二年)における羌関連の情報は『史記』に皆無なのである。これは、商代羌関連の史料を入手した秦漢人がほぼ皆無であったことをしめす別証である。おそらく既述のごとく、秦漢の人々は『尚書』牧誓と

『詩経』商頌を有するにすぎなかったのである。

また『史記』における羌の概念は、それがオリジナルの概念なのか、それとも『漢書』由来の概念なのかはともかく、二つの類例に分けられる。一つ目は現実もしくは伝説上の西方人か西方地域をさす「氏羌(1)・(8)・(13)」・「羌燮(10)・(11)」・「西羌(4)」・二つ目は西方辺境に沿った当時のトラブルメーカー(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)としての羌である。彼らの居住地域は「羌中(3)・(12)・(14)」と呼ばれた。中でも羌中が地理的に有する意味は、後漢時代の羌について数点の知見を提供するであろう。

羌概念の西方への移動

羌中という地名(文字通り羌の地)をさらに詳しく調べると、本来は洮水上流〜白竜江間の人々・地域をさした。⁽¹⁰⁾「だが」羌概念自体はのちに甘肅回廊や河湟地域の場所・人々をさすようにもなったようである。⁽¹⁰⁾羌概念の意味的変化は次のように裏付けられる。第一に、『漢書』地理志によれば、洄水(現在は白竜江と呼ばれる)は蜀山西南より生じて羌中を通⁽¹⁰⁾し、一方、洮水は西羌中に生ずるとわかる。⁽¹⁰⁾両事例の羌中はいずれも洮河上流〜白竜江間の地域をさす(図9)。

第二に、後漢時代に羌道なる地域が武都北西・白竜江沿いにあり、氏道東に鄰接していた。⁽¹⁰⁾その上、既述のごとく、秦の始皇帝の中国統一時に、秦帝国西側境界は洮河流域臨洮・

羌中に達したが、河湟地域・甘肅回廊にまでは達しなかったことが知られる。ここでいう羌中は、明らかに洮河流域・白竜江流域間の地域をさした。

漢の政治的権力が甘肅回廊へ拡大した後、地理的概念の羌中はこの新しい西方辺境をさすのに用いられた。この点は『漢書』地理志の以下の地理的叙述を検証することでわかる。当該史料によると、甘肅回廊の張掖には、羌中より発して北東のかた額濟納河（中国語の居延海）へ注ぐ羌谷水（現在は黒河と呼ばれる）があった。また酒泉の呼蠶水（討頼河）は南羌中より発し、東北のかた会水の羌谷へ注ぐ。敦煌の南籍端水（疏勒河）と氐置河（もしくは党河）はともに南羌中より発する。これら四河川（現在の黒河・討頼河・疏勒河・党河）は全て祁連山脈より発する（図9参照）。もし祁連山脈が羌中か南羌中であれば、羌中はおもに祁連山脈地帯と甘肅回廊を含むはずである。この見方は、漢代において張掖を南北に流れる河川の大半が羌谷水と称された事実からも裏付けられる。

この観点を補う証拠は他にもある。前漢武帝期に漢使張騫が大夏（バクトリア）から帰国した。彼が通過せんとして失敗したルートは、南山（もしくは祁連）山脈沿いに羌中を通過するというものであった。この場合の羌中も祁連山脈と甘肅回廊沿線地域をさす。また『漢書』趙充国伝によると、匈奴が羌中に達しえたはずのルートは、額濟納河南西からロプノールへ抜け、長城沿いに東方へ転進し、張掖属国へと向か

うものであった。本史料の羌中は甘肅回廊もさした。また最後に、後漢時代に羌中は隴西・北地・上郡・安定諸郡西方に広がる富裕な地と信じられていた。漢代河湟地域が必ずしも富裕でなかったことを念頭に置くと、この場合の羌中もおもに甘肅回廊地域をさしたはずである。

最後に、甘肅回廊上の漢代守備隊駐屯所の遺址より見つかった竹簡や木簡から、さらなる証拠が得られる。第一に、公的記録に「羌に殺された低級官吏全員に葬儀代三万錢を与える（各持下吏爲羌人所殺者賜葬錢三萬。267:9）」とあり、私的文書（と思われる別証に「私は徴兵されて羌中に住むようになって数年ですが、恩に報いる方法がなく……（置羌中數年无以報厚恩……。456:4）」とある。これらの竹簡・木簡は前漢宣帝神爵年間（紀元前六一年～紀元前五八年）のものである。前掲二史料は明らかに、後漢時代に張掖郡の中国人が甘肅回廊上の漢代守備隊駐屯所周辺を羌中と呼び、また地元の非中国人を羌と呼んでいたことをしめす。

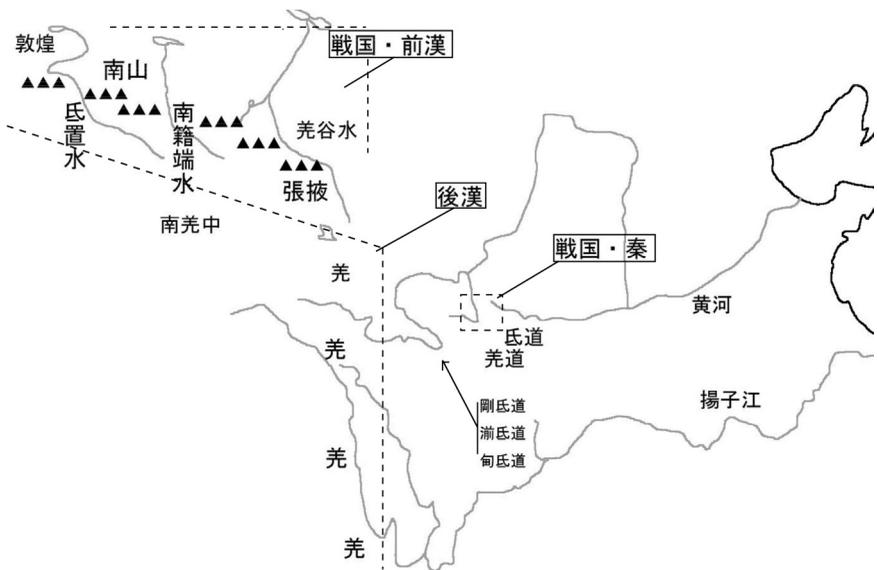
もつとも、広範囲な羌中地域には河湟地域（漢代中国人による占領後）も含まれたはずである。『漢書』地理志によると積石山は南西羌中に位置した。この場合の羌中は河湟地域を含む。

河湟地域の人々と漢代中国の人々が早期に接触した時の記録は次の史料にみえる。第一に、前漢景帝期（紀元前一五六～紀元前一四一年）に研種の種長留何は、漢に属して族民を

隴西に移住させた⁽¹⁴⁾。だが当該記録は、『後漢書』西羌伝にのみ見え、それ以前の『史記』や『漢書』にはみえず、よって疑わしい。次に前漢武帝期の紀元前一二二年に、二將軍が西羌の台頭を抑えるために派遣された。最も豊富に史料の残る早期の羌―漢関係は、後漢順帝期に生じた。本稿では第三章で当該史料に言及した。『史記』と『漢書』にみられる記載から、河湟人が漢文史料上に出現した最初期でさえ、彼らが一般に「西羌」と呼ばれ、ごく一部の事例に限り「南羌」とも呼ばれたことがわかる。他方、前漢時代に隴西・甘粛回廊の羌が「東羌」や「北羌」と表記されたことはない。このことはまた、漢代中国人にとつての羌概念がまず河湟地域の東方（隴西地域）や北方（甘粛回廊）の人々をさすものであったことを意味する。

以上、地理的用語羌中と族名羌が某時期にいかなる意味を有していたのかを具体的に画定するのは不可能である。だが全証拠が、羌中概念が不断に変動していたことをしめしている。羌中は前漢早期や秦代に初出し、洮河上流―白竜江間の地域をさした。そして漢軍と植民者の西漸に伴い、羌中と族名羌は最終的に甘粛回廊（のちに河湟）の地域や住民をさすようになったわけである。

後漢魏晉時代に族名羌はさらに西漸して東トルキスタンへ移った。すなわち、焞羌と赤水羌が陽水以西にいた。焞羌は、『漢書』によれば王国で、四五〇世帯（一七五〇人の遊牧民）



〔図9〕紀元前3世紀～紀元後3世紀における羌概念の地理的拡張

よりなり、卓越した製鉄技術を有していた。また焠羌はかつて羌一般の意に用いられたと思われる⁽²⁸⁾。その上、東トルキスタンにおける羌の痕跡は考古学的遺址にも見出される。タリム盆地北端の沙雅遺址における考古発掘では、「漢婦義羌長印(自ら漢に服属した羌の部族長の印)」の刻印が見つかった⁽²⁹⁾。

焠羌西方では後代にもっと多くの羌種族の存在が記録されている。魏晉時代(紀元前三二二年―紀元前四二〇年)には黃牛羌・白馬羌・葱此羌がパミール―焠羌間の崑崙山脈に分布していた。だが彼らの存在は漢代史料に見えない。

以上の論拠全てが、羌の語が遠く西方(以前より羌地であったが、漢代中国人の拡大とともに再編された地域)の人々をさしていたことをしめす。よって、かかる人々を指示するのに用いられた地名は、辺境拡大とともに新領域に付与されることになった(図9)。

羌概念の南西への移動

西羌伝によると、羌はまた漢代中国の南西国境沿い(現在の四川北方や西方であろう)に分布していた。北から南にかけて次のような多様な集団がいた。(1) 武都付近の參狼羌、(2) 広漢の境界を越えて住む白馬羌、(3) 周原西境外の大牂羌・竜橋羌・薄申羌諸族、(4) 越雋郡外の旄牛羌(図10参照)⁽³⁰⁾。

だが羌道付近の武都在住の人々を除く南西非中国人は、前

漢史料では羌とされていない。『史記』には、羌などという南西非中国人は存在せず、代わりに南西非中国人(氏とされた白馬以外)は夷とされた⁽³¹⁾。この点で『漢書』は『史記』に従っており、氏―羌の混血とされる人々が住む白馬地域のみ例外とされている。これは『後漢書』でも同様である。すなわち、西方国境沿いの非中国人全員が西羌伝では羌とされる一方、別巻の南蛮西南夷列伝では、白馬は氏とされ、その他全ての南西原住民(上述の大羊種や旄牛種)は夷とされている⁽³²⁾。また前漢時代には剛氏道・湍氏道・旬氏道が涪江上流と岷江上流に設置されたが、これらの地名は当時当該諸道が氏地であったことをしめすものであろう。

中国の歴史家の間には、氏と羌が一つなのか、それとも區別すべきなのか、白馬が氏なのか、それとも羌なのかについて論争があるが⁽³³⁾、これらの問題設定には検討の余地がある。というのも、エスニックラベルの氏・羌・夷は全て、外名であって内名ではないからである。これらの外名からわかるのは、彼らが実際にどう捉えていたのかである。よってこれは、中国人が彼らをどう捉えていたのかである。よってこれは、漢代中国人の他者認識と、漢代中国人―非漢代中国人間の相互交流の問題なのである。本稿の問題関心の範囲内というたとえは前漢中国人がもともと南西原住民(氏とされる武都付近の白馬以外)を夷と呼んでいたことは極めて明白である。

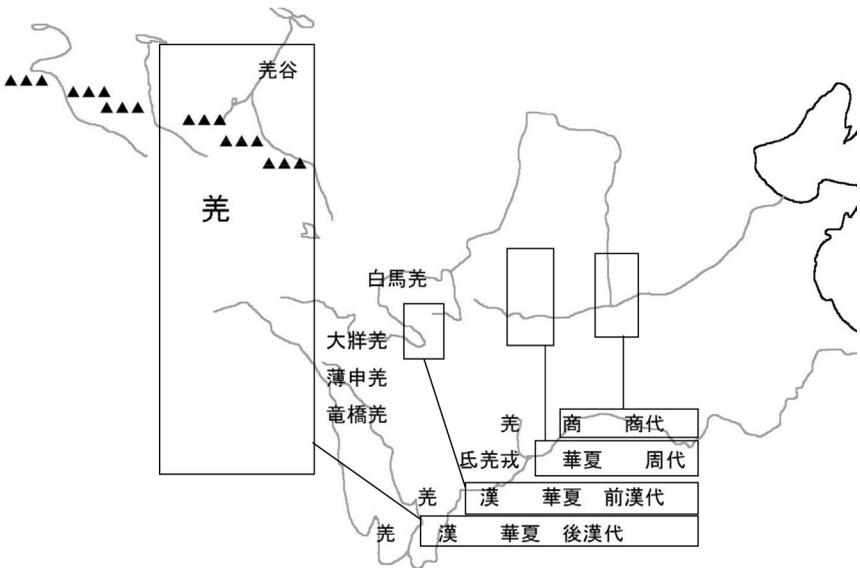
そして後漢時代に漢代中国人と中国政府下の夷との交流頻度

が強まる中、中国人は族称羌を用いて中国南西国境以遠の人々（中国人にとつて不可知の存在となりつつある人々）をさすようになった。

本章では羌が、商代～漢代に広範に分布し、かつ中国の拡大圧力のもとで西漸した人々ではないことを描き出そうとした。その代わりに羌は、当時の中国人が抱いた「我々ではない人々」という意味の概念であるとみなされた。中国の国家としての形成期にあつて、羌は変動的な民族的境界を構成したのである。

かくしてここにおいて我々は、古代中国人が西方民族的境界を描く上でいかに族称羌を利用したのかをしめしつつ、さらに完璧なヴィジョンを描き出すことができる（図10）。すなわち、商代において商人は西方非商人の一部を羌と呼んだ。というのも、羌は商人の抱く民族分類であつたからである。しかし当該の羌概念は武王征商直後に消滅し、それ以降は中国に新たな民族的領域が出現した、と。

そして周代になると、西方非中国人はおもに戎と呼ばれた。もともと戎は渭水流域の戦争好きの人々（姫と姜クランを含む）をさしたはずであつた。征商後、渭水流域の「文明人」の大半は華夏となり、戎は徐々に、とくに紀元前七七一の事件後には、華夏と非華夏を分ける新たな民族的境界を構成するようになった。そして秦人が、秦人自身と戎の大半を華夏に合併すると、華夏の西方境界は再度描き直されるべきものと



〔図10〕 商代～漢代中国

なった。

こうして、この新しい民族的境界は「氏羌」と称されるようになった。羌の語が使用されなくなつて五百年後に、族称の羌が「氏羌」という複合的な形で再度出現した。その過程は、以下の三段階を経たものである可能性が非常に高い。まず商代の古文獻上の「夷羌」なる語が複合的族称の「氏羌」の形で後世に伝えられ、戦国時代には遠く西方の伝説的人々をさすようになった。そして最終的に中国人が隴西に進出した際に、天水―洮河の非中国人と白龍江の非中国人が各々氏・羌（東の氏・西の羌）と称されるようになったのである。このような過程は、おそらく秦代もしくは前漢早期に完了したのであろう。

しかも漢代辺境が甘肅回廊・東トルキスタンへ拡大するや、羌概念はさらに遠く西方へ移動した。興味深いことに、隴西地域は、羌概念が氏概念と同じく北西・西・南西の三方向へ拡張するためのスタート地点となつた。北西ではまず、地理概念の羌中が隴西から甘肅回廊へ動いた。よつて甘肅回廊には羌谷水・氏赤・氏置水や、後世には敦煌以西に嬉羌といつた地名が散見する。

一方、南西辺境では、氏の民族的・地理的方向が甘肅南方から四川北方へ変動し、松潘地域まで達した。他方、羌人は漢帝国の西境に沿つて遠く南西へ移動した。かくて西羌伝では、広漢・蜀・越雋以遠の非中国人は全て羌と呼ばれるよう

になった。

西方でも同様のプロセスが繰り返された。すなわち漢軍と植民者の西漸に伴い、河煌原住民は羌と呼ばれるようになったのである。

第五節 漢代中国人の河煌原住民との遭遇

史料の限界ゆえに、甘肅回廊と四川西方の原住民が漢代中国人に羌とみなされるに至つた過程とその理由を探るのは不可能である。だが同時に多くの史料は、河煌人が羌の中核と解されるようになったことをしめしている。

そこで検討すべきは、漢代中国人が河煌人と接触するようになった際に何が起つたのかである。第一章では、河煌地域の自然環境について叙述したが、当該地域の自然環境は農業開拓の困難な地域であつた。レスの分布は限定的かつ疎らであつた。よつて農業は低地でのみ実施可能であつた。また漢文史料によると、漢代中国人が当該地域を争つた主たる理由は、政治的なもので、経済的なものではなかつた。漢朝はつねに、最大の敵である匈奴が他の非中国人（羌を含む）と組むのを恐れていた。

当該地域を統制するために、漢朝はいくつかの戦略を採用した。まず羌の数集落を河煌地域外の渭水流域諸郡に定住させた。第二に、軍事的植民地構築のために大量の民や軍隊を

河煌地域へ徙した。植民者は、軍隊か民かはともかく、当地で耕作に従事した。だが兩漢代に当該地域の軍事的植民地に費やされた努力は全て失敗か短命に終わった。失敗の要因は、当地の自然環境が農業に適さない点に求められるであろう。

よって漢—羌間の民族的境界の本質は、ある程度、環境的境界を主とするものであった。既述のごとく、前漢中国人一般の対羌認識は「虜は畜産を以て命と爲す」であった。また後漢の学者応劭は羌を「本と西戎の卑賤なる者なり。牧羊を主る」とする。漢代羌の考古遺址は見つかっていないものの、早期甲窯文化の葬送にみられる動物埋葬の存在が、家畜飼育を背景とする被葬者の価値観を窺わせる。

だがこの説明はまだ十全でない。すなわち西方辺境地域では、多くの漢代中国人が大量の動物を飼育していたことが知られる。漢と羌の最大の違いは、漢代中国人がごく一部の例を除き、間違いなく家畜を有する定住農耕民であったことである。一方、羌は遊牧民であった。よって羌が中国人と異なる点は、家畜飼育ではなく、その遊牧主義にあったのであろう。

第二に、中国人—河煌原住民間の民族的境界は、社会政治的にみれば羌が分散的社会組織を有するという点にもしめされる。第三章では、羌に種族以上の社会機構が存在しないことを述べた。漢代中国人からみると、分散的社会組織を有する集団は王の欠如を意味した。漢代中国人にとって王の欠如

は野蛮人の特長の中でも最悪で、それゆえ河煌原住民は相当野蛮とされた。

最後に、羌とされた大半の人々のうち、河煌原住民は最も頻繁かつ殺伐と漢代中国人に相対した。河煌原住民が羌の母体とされた理由はこれである。後漢時代には大規模な羌の反乱が二回あった。一回目は一〇七年—一〇八年、二回目は一九九年—一五〇年に起こった。羌の反乱後、反乱地域の戸籍登録上の中国人戸口数は大きく減少した。一四〇年の安定郡の戸口数は、前漢時代の同戸口数の一四%にすぎない。金城郡と隴西郡の戸口数は一〇%、北地郡は五%にすぎなかった。これらの数値は、反乱の被害の大きさを物語る。

たしかに河煌原住民は戦争中にさらなる大きな被害を受けた。すなわち、漢代中国人が羌の問題を解決するのに採用した最後の戦略は、羌の反乱者を根絶やしにすることであった。当該計画の内容と執行者は將軍段熲であった。史料によると段熲は、「凡そ百八たび戦い、三萬八千六百餘級を斬り、牛馬羊驢駱駝四十二萬七千五百餘頭を獲」たという。別の將軍張奐は、この段熲の血塗られた計画に反対し、羌と中国人とは「一氣所生」ゆえに羌は根絶されるべきではないと述べた。しかし張奐の計画は、段熲に「誕辭空説」と批判されただけでなく、それは西羌伝巻末の論贊でも徹底批判された。かかる批判は明らかに「羌は人に値しない」との当時の思考を反映する。

以上のごとき漢と羌の遭遇の歴史は、中国側の文化的寛容度の限界を物語る。中国人は遊牧的生活を自らの生活とし、遊牧民を自らの一員として受容することができなかった。漢代中国人は経済的・政治的・社会的領域の全てでとくに「調和」と「秩序」を強調した。西羌伝における羌の経済的・社会的生活の概説は、羌がなぜ漢代中国人と異なっているのかに関する漢代中国人自身の説明（羌を野蛮人と強調する説明）と解される。それを詳細に検討すると、本史料がとくに羌側の「非調和」を強調しているとわかる。すなわち羌は固定的な住居・クラン・リネージ・政治的結合性をもたない、と。つまり漢代中国人にとつては、野蛮人の存在が民族的境界を特徴付けたのである。

他方、漢—羌の遭遇の歴史は、河湟原住民が中国式の生産・社会組織を採用できなかったことを物語る。このことは、河湟地域から中国領内に移住した羌の種族のみが中国化したという事実にもしめされる。逆にだからこそ羌人は、自らの生産・社会組織を有する存在として、漢代中国人の民族的境界を越境し続けた。これは第二章で論じたように、羌の生産方法と附随的な社会組織が、特定の環境下において彼らの生態系が特化した結果であるからであろう。漢代に当該地域の収容力が改良を要した場合、最善の方法は農業に代わってヤク飼育を行うことであった。これが、漢代以後に河湟人が徐々に中国人化以上にチベット人化した理由であった。

結論として漢文史料中の羌は、商代—漢代の時間・空間内において非中国人的民族的一連性をもった存在であったとはみなせない。逆にエスニックラベルの羌は、ある意味で、各時代における中国人の民族形成史を反映している。漢文史料中における漢代河湟羌の出現と、河湟羌—中国人間の血塗られた対決は、中国人の西方への民族移動が最終段階に達したことを物語る。それ以来、中国の西方民族境界は固定的となった。以上の結論は明らかに定説と対立する。本章の主目的は、かかる定説の誤りを論証するのみならず、もっと重要なことに、数点の基礎的問題を議論することである。すなわち、民族の本質とは何か。そして民族単位は歴史学的にいかに定義されるのであろうか。（次号へ続く）

注

- (1) Eberhard, Wolfram (1968) *The Local Cultures of South and East China*, trans. Alide Eberhard, Leiden: E.J.Brill, p.2°.
- (2) Leach, Edmund (1954) *Political Systems of Highland Burma*, London: G.Bell & Son Ltd, Reprint: Fletcher & Son, 1964, pp.279-286°.
- (3) Naroll, Raoul (1964) On Ethnic Unit Classification, *Current Anthropology*, vol.5, no.4, pp.283-291 & 306-312, and Comments, pp.291-306; Moerman, Michael (1965) Ethnic Identity in a Complex Civilization: Who are the Lue?, *American Anthropologist*, vol.67, no.5, Pt.1, pp.1215-1230°.
- (4) Barth, Fredrik (1969) Introduction, In: Barth, F. ed. *Ethnic Groups*

and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference, London:

George Allen & Unwin, p.10^o.

(5) Moerman, *op.cit.*, pp.1219-1220.

(6) 外名が内名と一致する場合がある可能性を否定はできない。たとえば外名の羌は現在、*ma* (内名) と自称する民族をさす。また少数民族は、時に自分達以上に強大な民族から外名を与えられ、長期間の交流を歴て、その外名を自らの民族をしめすラベルとして受け入れてゆくかもしれない。このような事例は、北米インディアンや台湾「山民」にみられる。

(7) 郭沫若『西周金文辞大系考釈』(東京、文求堂、一九三五年、二三五—二三六頁)。

(8) 羅振玉『增訂殷墟書契考釈』巻中(東方学会、一九二七年、一〇—一一頁。訳者注——王氏は藝文印書館一九六九年版を引用)。

(9) 李孝定『中央研究院歷史語言研究所專刊之五十 甲骨文字集釈』第四、一九六五年、一三二—一三四二頁。訳者注——王氏は三七七—三七五二頁を引くが関連記載未発見。

(10) 陳夢家『殷墟卜辭綜述』(科学出版社、一九五六年、二八一頁)。

(11) 李学勤『殷代地理簡論』(科学出版社、一九五九年、七七—八〇頁。訳者注——当該頁に関連記載未発見)。

(12) 白川静『羌族考』(『甲骨金文学論叢』第九集、私家版、一九五八年、四五頁)。

(13) 烏邦男『殷墟卜辭研究』(中国学研究会、一九五八年、四〇四—四〇六・四二三頁。訳者注——王氏は台北の鼎文出版社一九七五年中文翻訳版を引用)。

(14) 李学勤『殷代地理簡論』(科学出版社、一九五九年、八〇頁)、顧頡剛『從古籍中探索我国的西部民族——羌族』(『社会科学战线』一九八〇年第一期、一一八頁)。

(15) 烏邦男『殷墟卜辭研究』(中国学研究会、一九五八年、四〇四—四〇六頁)。

(16) 「王夷次令五族戍羌方(合集28053)」。訳者注——王氏は各拓本から直接甲骨文を引用しているが、本訳稿では読者の便宜を考え、出版番号を中国社会科学院歴史研究所編『甲骨文字集』(中華書局)に統一した。ただし釈文は王明珂氏の原文による。

(17) 「貞登帚好三千[旅萬乎伐羌方(合集2902)]」。
(18) たとえば「三百羌用于丁(合集295)」、「羌用于祖乙(合集379)」、「羌二方白其用于祖丁・父甲(合集2692)」参照。

(19) 冉光榮・李紹明・周錫銀『羌族史』(四川人民出版社、一九八五年、二六—二七頁。訳者注——王氏は出版年を一九八四年とするが誤りか)。

(20) 顧頡剛前掲論文『從古籍中探索我国的西部民族——羌族』一一九頁。

(21) 李学勤前掲書『殷代地理簡論』八〇頁。

(22) Moerman, *op.cit.*, pp.1219-1223.

(23) 商人の目に写る羌の非人間的性質は、羌が犠牲とされる時にも犠牲獣と陪葬されていた事実からも窺える。「己未宜于羴羔三、卯十牛。中(合集338)」の「羊」とある。

(24) 顧懷三編『補輯風俗通義佚文』(『金陵叢書丙集之五』十四頁)、『太平御覽』卷七九二引『說文解字』羌字。

(25) 『史記』卷四、傅斯年「姜原」(傅斯年全集)第三卷、聯経出版事業公司、一九七〇年、二二三—二三三頁。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二本第一分、一九二〇年初出、顧頡剛前掲論文『從古籍中探索我国的西部民族——羌族』一一〇—一一三頁、Pulleyblank, E.G. (1983) The Chinese and Their Neighbors in Prehistoric and Early Historic Times. In: Keightley, David N. ed. *The Origins of Chinese Civilization*, Berkeley: University of California Press, pp.420-421.

- (26) Hsu Chio-yun & Linduff, Kathryn M. (1988) *Western Chou Civilization*, New Haven and London: Yale University Press, pp.55-59。冉光榮・李紹明・周錫銀前掲書『羌族史』二九—四九頁、顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我國的西部民族——羌族」二〇—二二五頁、Pulleblank, *loc.cit.*。
- (27) 傅斯年前掲論文「三二頁、顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我國的西部民族——羌族」二二頁、冉光榮・李紹明・周錫銀前掲書『羌族史』二九—三三頁、Pulleblank, *loc.cit.*、Hsu & Linduff, *loc.cit.*、馬長壽『氏与羌』(上海人民出版社、一九八四年、九二頁)。
- (28) 『後漢書』卷二一七。
- (29) 顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我國的西部民族——羌族」一一—一二二頁、徐旭生『中国古史的伝説時代(増訂本)』(科学出版社、一九六〇年、再版・北京文物出版社、一九八五年、四一—四二頁)。
- (30) 『後漢書』卷二一七。
- (31) 『後漢書』卷二一七。
- (32) 『後漢書』卷二一七。
- (33) 『詩経』商頌殷武「昔有成湯、自彼氏羌、莫敢不來享、莫敢不來王」参照。
- (34) 『尚書』牧誓篇によれば、武王は臣下と八つの非中国人の盟邦へ演説した。当該八国は庸・蜀・羌・髳・微・盧・彭・濮であった。
- (35) 黄烈「有閩氏族来源与形成的一些問題」(『歷史研究』第二号、一九六五年、一一一頁)。
- (36) 歴史家と注釈家の区分は必ずしも明瞭ではないが、これら二種類の学統は分ける必要がある。羌の場合、たとえば『淮南子』斉俗訓の晉・高誘注は羌を東戎、氏を南戎とする。また『春秋穀梁伝』隱公二年の晉・范寧注は、南蛮・北狄・東夷・西戎、つまり全方向の野蛮人が氏羌の支族であったとする。高誘や范寧は明らかに、『史記』・『漢書』・『後漢書』にみられる羌や氏羌とは全く異なる羌や氏羌を想定している。高誘と范寧の例は、注釈家が古典籍中の地理的・民族的用語に対する独自の解釈法を有していたことをしめす。だが彼ら注釈家の見解が当時の定見を代表するとは限らない。
- (37) 顧頡剛「四嶽与五嶽」(『史林雜識初編』中華書局、一九六三年、三四—四五頁)。
- (38) こころでは秦人は、秦による征服以前の渭水流域における嬴クラんとその追従者をやす。
- (39) 華・夏・華夏は内名であり、それによって中国人は自己を認識した。その起源と指示対象は不明瞭である。だが春秋時代に上記の内名はどれも、黄河流域の諸国が自らの民族アイデンティティを主張する際に使用された。彼らはそれによって自分達を、戎や氏の野蛮人、あるいは呉・越・楚・秦といった辺境諸国の人々と区別した。
- (40) Latimore, Owen (1940) *Inner Asian Frontiers of China*, Oxford: Oxford University Press, Reprint: Hong Kong: Oxford University, 1988, p.388 & 345。
- (41) Hirth, Friedrich (1908) *The Ancient History of China*, New York: The Columbia University Press, pp.184-188。
- (42) Eberhard, Wolfram (1942) Kultur und Siedlung der Randvölker Chinas, *T'oung Pao: archives concernant l'histoire, les langues, la géographie, l'éthnographie et les arts de l'Asie orientale*, Supplément au v.36, Leiden: E. J. Brill。
- (43) Pulleyblank, *op.cit.*, pp.419-421。類似の見方は Bishop, C.W. (1934) *The Beginnings of North and South in China, Pacific Affairs*, vol.7, no.3, p.310 にもみられる。
- (44) 『説文解字注』。訳者注——王氏は藝文印書館一九七四年版、六

三六頁引用。

- (45) Pulleyblank, *op. cit.*, p.421、顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我國的西部民族——羌族」一二四—一二五頁。
- (46) 『史記』卷四。
- (47) 『左伝』莊公二八年に姫クランの戎がみえる。本史料によれば、晉獻公は戎の二集団から妻を娶ったが、この二名の妻はどちらも姫姓であった。Pulleyblank, *op. cit.*, pp.419-421を参照。
- (48) 『左伝』僖公三三年・襄公十四年、Pulleyblank, *op. cit.*, p.420。
- (49) 『史記』卷四。
- (50) 『史記』卷四、卷五。
- (51) 馬非百『秦集史』（中華書局、一九八二年、四頁）。
- (52) 王国維『秦都邑考』（『王觀堂先生全集』第二卷、文華出版公司、一九六八年、五一—五一五頁）、蒙文通『秦為戎族考』（『禹貢』第六卷第七号、一九四七年、十七—二〇頁）。
- (53) かりに秦の文化的要素の一部に東方同様の要素が見出されたとしても、秦人を東方起源とする見方にはまだ疑問が残る。もし西方出身の野蠻人がいくつかの有名な西方クランの子孫であると自称した場合、東方的伝統の文化的実践は模倣され、あるいは意図的に強調させられたかもしれない。これはとくに、戎の中で暮らし華夏アイデンティティを主張する秦人にあてはまる。この点、Hodder, Ian (1978) *The maintenance of group identities in the Baringo district, Western Kenya, Social Organization and Settlement, BIR Supplementary Series*, no.47, pt.1, Oxford: British Archaeology Reports, pp.47-61は、ケニアのパリンゴに関する古典的研究を行い、物質文化がいかに過度に、ローカルな民族の関係性における不可欠な論理的構造のピースとしての民族アイデンティティを表現する際に用いられるかをしめしている。
- (54) 本史料によれば、中濤は西方に移動して戎と暮らすようになった最初の祖先である。『史記』卷五参照。
- (55) 『史記』卷五。
- (56) 西周時代における姜クラン—嬴クラン間のエリート間婚姻は、華夏の一流家族の娘と野蠻人の指導者層と婚姻（たとえば漢代における漢と匈奴の婚姻）と類似するものとはみなせない。なぜなら申と大駱はともに戎とされ、姜クランの申と嬴クランの大駱は、姫—姜—嬴—戎間の薄弱な関係性の復活を象徴することくであるからである。
- (57) 『史記』卷五、卷一〇。
- (58) Pulleyblank, *op. cit.*, p.421。
- (59) いわゆる中国化 (sinicization) を定義する必要がある。一般に認められているごとく、非中国人が中国化する場合には、史料上、彼らが中国の言語・文章構造・習俗・他の文化的要素を採用するのが明瞭に看取される。だが先学は、いわゆる「中国文化」が幅広い多様性（諸言語を含む）を有することから、長らく次のような疑問を抱いてきた。すなわち「中国」にはかくも文化的に異なる人々がいたのに、なぜ彼らは自分達を一つの民族として認識するようになったのか、と。「中国人」が文化的特長の結合体と定義されるか否か、また「中国化」をこれらの文化的特長の採用過程と定義できるか否かに疑義を呈するのは非常に容易である。
- 別の解釈も提示されるかもしれない。そもそも文化的実践は、非中国人の中国人化にはあまり重要ではないであろう。かつて非中国人が中国人になろうとした時に最も重要であったのは、彼らを中国人として合理的に位置付ける血統と民族形成史話であったろう。春秋戦国時代に全ての辺境諸国（呉・越・楚・秦など、本来は華夏の外に位置付けられた国）は中国化したのが、例として呉人は周太伯の子孫を、越人は夏の少康の末裔を、楚人は伝説上の高陽の子孫を、秦人は高陽の別系統の子孫を自称したことがわか

る。かかる民族形成史話が一旦華夏諸国に受容されると、そのよ
うな辺境の人々は疑いもなく華夏とみなされたはずである。この
ような中国化の好例は、魏晉期の羌に看取される。この点につい
ては第五章で検討しよう。

- (60) 『詩経』卷二〇商頌。
(61) 『逸周書』卷七王会解。
(62) 『荀子』卷十九大略篇、『呂氏春秋』卷十四義賞。
(63) 『呂氏春秋』卷二〇恃君。
(64) 屈万里『先秦文史資料考辨』（聯經出版事業公司、一九八三年、一〇九頁）。
(65) 屈万里前掲書『先秦文史資料考辨』三九八頁。
(66) 袁行霈『山海経』初探（『中華文史論叢』一九七九年第三輯）
参照。
(67) 梁啓超『要籍解題及其説法』（北京書局、一九二〇年、八五頁、
初版は一九一五年）、屈万里前掲書『先秦文史資料考辨』四〇九—
四一〇頁。
- (68) 屈万里前掲書『先秦文史資料考辨』四三九—四四二頁。
(69) 『逸周書』王会解。
(70) 『呂氏春秋』卷二〇恃君。
(71) 『呂氏春秋』卷十四義賞。
(72) 『荀子』卷十九大略篇。
(73) 『墨子』卷六節葬篇。
(74) 注目すべきは、漢代中国人は河湟羌について詳細に記録してい
るが、羌の埋葬習俗については全く舐れていない点である。周
知のごとく、漢代中国人は死体の埋葬を真剣に行つた。もし河湟
羌が火葬を実施しておれば、漢代中国人はおそらくそれにショッ
クを受け、その習俗を記述したであろう。よって火葬の実施に関
しては、戦国時代の氏羌は、漢代河湟羌とは何の関係もなかった

ものと思われる。

- (75) 董作賓「殷代的羌与蜀」（『説文月刊』第三卷第七期、一九四二
年、一〇七頁）、陳夢家前掲書『殷墟卜辞綜述』二八〇頁。
(76) 李孝定『中央研究院歷史語言研究所專刊之五十 甲骨文字集積』
三七三七—三七五二頁。
(77) 董作賓前掲論文「殷代的羌与蜀」一〇七頁。
(78) 陳夢家前掲書『殷墟卜辞綜述』二七九—二八〇頁。
(79) 秦代の当該地域の地図が天水付近の墓葬から出土した。そこに
は二八の地域名があるが、封丘以外の地名は漢文史料にみえない。
甘肅省文物考古研究所・天水市北道区文化館「甘肅天水放馬灘戰
国秦漢墓葬的発掘」（『文物』一九八九年第二期、一二—二二頁）。
(80) 『漢書』卷三。
(81) 『後漢書』卷一一七。
(82) 『史記』卷一。
(83) 『史記』卷四。
(84) 『史記』卷六。
(85) 『史記』卷十五。
(86) 『史記』卷二二。
(87) 『史記』卷三〇。
(88) 『史記』卷一〇九。
(89) 『史記』卷一一〇。
(90) 『史記』卷一一一。
(91) 『史記』卷一一二。
(92) 『史記』卷一一八。
(93) 『史記』卷一二三。
(94) 『史記』卷一二三。
(95) 『史記』卷二二八。
(96) 『史記』卷二二九。

- (97) 崔適『史記探源』、梁啓超前掲書『要籍解題及其詁法』。
- (98) 『漢書』卷六二の張晏注。
- (99) 二つの出来事があった。一つは將軍の趙充国と辛武賢が紀元前六一年に羌を攻撃した出来事、もう一つは任千秋が紀元前四二年に羌を攻撃した出来事である。『史記』卷二二参照。
- (100) 『漢書』卷二四下、『漢書』卷六一。
- (101) 崔適『史記探源』卷四・卷八、梁啓超前掲書『要籍解題及其詁法』五四—五五頁。
- (102) 『史記』卷一一二。
- (103) 『漢書』卷六四。
- (104) 崔適『史記探源』卷一。
- (105) 梁啓超前掲書『要籍解題及其詁法』四四頁。
- (106) 崔適『史記探源』卷八。
- (107) そうすることによって司馬遷は『史記』を、古典の『春秋』（孔子の撰書。孔子は本書を魯哀公が麟を捕獲した年で閉じた）と比べ合わせようとした。
- (108) 王俊傑「論周の羌と秦漢魏晋南北朝の羌」（『西北師院學報』一九八二年第三期、八四頁）。
- (109) Yu Ying-Shih (1967) *Trade and Expansion in Han China: A Study in the Structure of Sino-Barbarian Economic Relations*, Berkeley: University of California Press, pp.105-106 は「羌中」を「野蠻なる羌人のあいだで」と訳し、『史記』卷二二九の「西有羌中之利」に従い、「我々の時代が訪れた時にはすでに、野蠻なる羌人達から利益が得られることは中国人達に知られていた」とする。余英時氏はまた『後漢書』卷六一から別の論拠を挙げて、漢—羌交易の繁栄ぶりを裏書している。本史料は、光武帝早期に甘肅回廊の姑臧で「通貨羌胡、市日四合」といわれる程に繁栄していたことをしめす。これは間違ではないが、単純すぎる解釈である。第一に、漢

- 代に羌中という語は實際上地名であり、羌の住む地域をさした。第二に、後述することく、秦漢時代における羌中概念の地理的含意は隴西から河西（甘肅回廊）、そして最終的に河湟地域へ西漸した。よって、漢代河西地域に漢—羌間交易があったとする余英時氏の指摘に誤りはないのだが、余英時氏は、甘肅回廊の非中国人を羌と呼んだのが族称羌のより早期の用法であったことを見落としている。後漢時代に羌はおもに河湟地域の人々をさし、河湟人も『後漢書』西羌伝の羌の母体であった。だが河湟は当時貧乏な地域であった。また河湟人が漢代中国人と経済的交流関係を有していたとする論拠はない。よって、族称羌が異なる時期に異なる意味を持った可能性を検討しないままで漢—羌の交易関係について議論すべきではない。漢—羌の交易関係に関する余英時氏の見解は、エスニックラベルの現実上の人口の意味が時間軸に沿って変化することを十分に認識しないことが、いかに羌に対する誤解を生んでいるのかをしめしている。
- (110) 『漢書』卷二八上。
- (111) 『漢書』卷二八下。
- (112) 『漢書』卷二八下。
- (113) 『史記』卷六。
- (114) 『漢書』卷二八下。「羌谷水」や後掲の「呼蠶水」・「南籍端水」といった地理用語の現代的表記については、顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我国的西部民族——羌族」一三五—一三六頁参照。
- (115) 『漢書』卷二八下。
- (116) 『漢書』卷二八下。
- (117) 『史記』卷二二三。
- (118) 『漢書』卷六九、顧頡剛前掲論文「從古籍中探索我国的西部民族——羌族」一三三頁。
- (119) 『史記』卷二二九。

- (120) 中国社会科学院考古研究所編『居延漢簡甲乙編』下冊（中華書局、一九八〇年、一九一頁）。
- (121) 前掲『居延漢簡甲乙編』二五三頁。
- (122) 『漢書』卷二八下。
- (123) 『後漢書』卷一一七。
- (124) 『漢書』卷二八下、『漢書』卷九六下。
- (125) 『漢書』卷九六。
- (126) 『漢書』卷七三。
- (127) 新疆维吾尔自治区博物館編『新疆歷史文物』（文物出版社、一九七七年、一八一—二頁、訳者注—王氏は一八一—一九頁を挙げるが不十分。だが本印が羌のリーダーのものであった可能性は否定できない。
- (128) 『三國志』卷三〇烏丸鮮卑東夷伝の裴松之注所引『魏略』。
- (129) 『後漢書』卷一一七。
- (130) 『史記』卷一一六。
- (131) 『漢書』卷九五。
- (132) 『漢書』卷二八下。
- (133) 『後漢書』卷一一六。
- (134) 『漢書』卷二八上、譚其驥編『中国歴史地理集』第二卷（地図出版社、一九八二年、二九—三〇頁）。
- (135) 李紹明『関于羌族古代史的幾個問題』（『歴史研究』一九六三年第五期、一六五—一八二頁、張建昌「民族的興衰及其活動範圍」、『蘭州大学学报（社会科学）』一九八二年第四期、五四—六三頁、

黃烈「有関氏族来源与形成的一些問題」（『歴史研究』一九六五年第二期、九七—一〇四頁）、胡昭儀「論漢管的氏羌和隋唐以後的羌族」（『歴史研究』一九六三年第二号、一五三—一七〇頁）。

(136) 管東貴「漢代的屯田与開邊」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』第四五本第一分、一九七三年、八〇—八四頁）。

(137) 冉光栄・李紹明・周錫銀前掲書『羌族史』八二頁。

〔付記1〕本章よりも前の部分に關しては、訳稿がすでに『早稲田大学長江流域文化研究所年報』第三—五号に連載されているが、第三号掲載分が「中国漢代の羌（一）」、第四号掲載分が「中国漢代の羌（二）」と題するのに対し、第五号掲載分は「古代中国漢代の羌（三）」と題する。これは前二者の訳者が本問責之、後者の訳者が楠沼陽平で、途中で訳者が交代した際に起こったミスである。原著者と読者の方々に深くお詫びする次第である。ここに修正して訳稿題目を「中国漢代の羌」に統一し、また本号掲載分の題名も「中国漢代の羌（四）」とする。

〔付記2〕本訳稿は、訳者の平成二—三年度文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励費（研究課題「中国古代贈与交換史の研究—「貨幣経済」と「贈与交換」の關係を中心に—」）による研究成果の一部である。

〔著者〕台湾中央研究院歷史語言研究所研究員・中興大學歷史學系講座教授兼文學院院長
〔訳者〕日本學術振興會特別研究員P.D)